

本音だけ小さく丸めて祖母になる

まちりこ 埼玉県

成り方の哀しさ。丸め続ける中で本音の濃度は高くなるけれど、どんどん小さくなる。ひとりぼっちの心を正当化するような憐れさを感じてしまう。その成れの果てが主体にとっての祖母なのだ。

南部鉄器の風鈴だれもない家

azusa 京都府

誰もいない、生命体がいなくなった空間に南部鉄器の硬質で涼やかな音色が響く。空間毎に命を宿せる器の数は決まっていて、人間がいなくなった代わりに風鈴の音や風鈴そのものに命が宿ってしまったような存在感を思わせる。

ゆさぶられ抜け落ちる主語蚊食鳥

字坊 人造 宮城県

他者から望まぬ力をかけられ揺さぶられるのは苦しくて不快である。耐え切れず、意図せず取りこぼしてしまうものもあるだろう。「蚊食鳥」とはコウモリの異名。黒くて小さな体が揺さぶり落とされた主語のよう。

にんじんのワッペンを縫う

子ができる

杉本 太 北海道

どちらも子どもが欲しい心が根底にあって起こること。けれど順番をつけようとする見過ごせない不自然さが生まれるのはなぜだろう。準備をしたから子ができるのか、子ができるから準備をするのか。命の存在にうまれてしまう順番。

とても駄目、駄目だと思う

紫陽花のおおのの放心を眺めて

太代 祐一 神奈川県

本当に駄目なのだろう。もう自分の領域は終わって、見届けるしかないとき。「おおの」とは駄目になった対象と主体のことだけでなく、紫陽花に宿っている仄かな意識も含まれている気がする。目に映る全ては、心によって色あせる。

うまく眠れないたましい達が行く

夜の向こうのラベンダー園

飛和 長野県

体は不自由だけれど、たましいなら何処まででも飛ばすことができる。眠れない夜に、香りのよいラベンダー畑でひとときを過ごすたましい。夜の向こうという、身体も時間も超えた穏やかな空間が何処かにあると思えば、少しだけ寂しきは紛れる。

たんぽぽを吹かせて貰う間柄

奥井 健太 滋賀県

どんな間柄かと思うと全く分からない。分からないけれど、二人だけに通じる親密な何かがあるのだ。相手の持ったたんぽぽに顔を寄せ、息を吹きかける。息というのは、極めてプライベートな部分だと感じる。それをさらしあえる、近すぎるほどの間柄。

蛾が群れる

死にたい人は何処ですか。

齊藤 栞 埼玉県

生き物の存在に意味なんてないけれど、ないはずなのに醸し出される何かがある。蛾の群れには生き物の死を探しているような気配があった。けれどそこに悪意はないのだ。命の生と死に価値の差はなくて、蛾はただ死を探しているだけ。

まだ固い桃のもも色 約束を

おそれていないひとの目の色

羽水繭 大阪府

熟れていない桃の、硬く締まった白色。人間にも、知らないからこそ純潔さと硬さが存在する。恐れていないというのは、まだ経験がない・何も知らないからでもある。約束という不確かなものをまっすぐ信じて見つめる危うさ。

向日葵の先も向日葵別れよう

絵巻 東京都

目の前の大輪の向日葵の先にも、延々と向日葵が続く。変わらないというのは、変化を望んで動いても同じ場所に置かれ続けるということ。両者がそれを望めば完結するが、片方が変化していく中でバランスは崩れる。別れとは、心が伴っていなくても抗えないもの。